



佐 啓

社会福祉法人 佐 啓 会 ふる里学会
〒290-0265 市原市今富1110-1
☎0436-36-7611
発行者 里 見 吉 英
編集者 三 股 金 利

乾 杯

里 見 吉 英

いつものことだがちよつと退屈なものである。私の役目は通り一変の挨拶を済ませると、あとは用無しどころかひな壇の端の席でおだやかな顔を作りながらただじつと座っていることである。下の席を見ると職員がワイワイガヤガヤと楽しそうに飲んでいる。それにしてもうちの職員は、よく飲むものだと感じる。ボーイがお酒を運んでくるともう追加の注文をし、かとはハラハラする。たまに気のきく職員が私にお酒を注ぎにきては立ち去る。ご両親やご家族が注ぐ職員が「先生退屈そうだからここに一本ワイン置いときますよ」と持ってきてくれるが、ひな壇にボトルを置いておくのはルールに反するらしく、気がつくともボーイがどこかへ運び去ってしまう。話をしようとして隣を見て、はるか彼方に愚妻がやはり退屈そうに顔だけはニコニコと座っている。大声で怒鳴り合わなければならないのでそれもみつともない。妻は「もうこんな面倒なことは引き受けてこないでよ」と言ひながら、

やれ、美容院はどこで何時だ。この着物はもう若すぎるから次は買わなければ」などといつもと違うトーンである。これはこの次引き受けてくれば買うぞという念押しのようなものである。当日はまず両親を間違わずにすることから始まる。私も妻もご両親とは結納の一回きりしか顔を合わせていない。(実は向こうから挨拶されるのを待っている。これが正解。大体新郎新婦と顔が似ているので間違ひは少ないが両親のご兄弟が多い場合はあぶない。)

あまり退屈なうえに下の席が盛り上がりつつあるので思わず席を立ち仲間に加わりたいたい気持ちなのだ。が「仲人は席へお戻りください」と以前ボーイが飛んできてやられたことがあり、それ以来それは止めることにした。今回はそれに加えてひとつミスも犯した。妻曰く「こういうときぐらい結婚指輪をしていきましょ」と用意してくれた指輪をはめてくるのを忘れてしまった。左手薬指を隠しながらの妻との会話である。バレると後が恐い。(施設職員は指輪をする習慣が無い。何故なら介助中に指輪と指の間にな

ンチが着いてしまうことがあり後が大変だからだ。)

人とは勝手なものである。祝宴に呼ばれなければ寂しい気持ちがあり、声が掛ければ良かったて偉劫なものである。

今回はも暇やかで楽しい祝宴であった。終わってホツとする。まずはメダシめでたし。いつも感激する場面はひとつふたつある。ホテルの演出によるものは先が見えて美味なものだが、今回もよい場面があった。テーブルスピーチでのごこと、普通乾杯が終わるとテーブルごと盛り上がり、話し手の一人相撲ということが多いが、たまに静まり返るスピーチというものもある。八十六才の新郎の祖父、年齢を感じさせないかしくしゃくとしてしつかりと論ずるようにな夫婦に話しかける。私との年齢差四十才。どんな答め言葉や激励の言葉よりも重みがあった。「身近な人を大切にしないさい」というような内容だったと思う。さらにそのスピーチの最中、我が職員のテーブルに目を移すと三十才の大きな男が涙している。これには驚いた。普段涙とは一番縁のない男だと思っていたからだ。後でその理由をそつと質すと「爺さんが出てくるとそれだけで俺駄目なんです」と一言。そういえば彼の家族にも一昨年まで祖父が同居していた。私との長い付き合いになる

彼は、その頃、私と話をする度に「うちの爺さんボケちゃって困るんですよ」と何度も聞いたことがある。手に余って特養ホームにショートステイしたこともあるそうだ。「でも君、爺さんのことあるならに嫌がってたじゃないか」「生きてるときは本当にそうでしたけど」「家庭内の葛藤は確かに話を聞く度に大変だったと私なりに記憶している。しかし身近で一緒に生活しているというだけで、他人に分らない情というものが湧くのだらう。」

乙武 洋臣著「五体不満足」サラッとさりげなく爽やかな文章である。その文面からは家族の葛藤が実感として伝わってこない。しかしその苦勞は察して余りある。(こういう言葉は乙武家には迷惑だろう)乙武君と小さな頃から一緒に育った仲間たち。少なくとも障害者と離れて生活しなびたたちは比べものにならないくらい情という点で体に染み込んでいることだらう。それで彼はこんなことも言っている。

「障害児の親が過保護になる要因としては『かわい』という気持ちよりも、『かわいそう』という気持ちの方が強いように思う。親が子供のことをかわいそうと思ってしまうえば、子供はそのことを敏感に感じとるだらう。そして自分はやっぱかわいそうな人間な



新郎新婦に幸あれ

(施設長)

兄貴はジャイアン

西川 智久

もう、既に二十年來の付き合いとなるが、今さらになって、どうこう言うのも正直に言っただけだ。それに加えて、一体何について書いてよいのやら困ってしまう。

私が、二十年以上も兄とふれ合ってきた、全くもって変わらないと思うことが一つある。それは非常に野性的という動物性というところである。本能的にこれは変化しない。むしろ、年を重ねるごとに、その傾向が強くなっていくように思えるのである。以前は、そんなに気にしていなかったのであるが、このところ何年かの容姿や様相を見てみると、本当に動物かと思ってしまうところがある。

もともと、顔の系統はサル系だとは思っていたのであるが、行動も不思議なのである。時々、家のソファに座って(点を見つめながら)じっとして動かないことがある。何を思案しているのかわからないが、何か考えているようである。かと思えば、突然、むくむくと立ち上がり、今度は、部屋の中をぐるぐる回って歩き回ったりする。意味はわからないが、何か再び考えたような顔をしながら歩いている。まるで、自分の世界を構築して、その中を歩いているようである。

また、動物性ということに加えて、ジャイアンであることも言うことができるかもしれない。今でこそ、多少落ち着いてきた感があるが、ジャイアン好調期はひどかった。

もう十年程前であったと思うが、家族で夕食を食べていると、常に兄が目光らせているのである。どういふ事かという、他の人が目を離した隙に、その人の食事を取って食べてしまうのである。そして、食べたのがばれて怒られると、今度は、暴れるのである。何て自分勝手なんでしょう。その頃から、家

では食べられる前に食べるというのが、暗黙の了解ならぬ暗黙の教訓となった。そのため、早く食べる癖が身に付いて、なかなか抜くことができなかった。

次に、これは動物的かどうか、明確には言うことができないのであるが、昔に見聞きした物を覚えていていうことである。自分が二歳あるいは三歳頃に兄が見た物を今でも口にするのである。もちろん、自分がその言葉を聞いたところからわかるはずもない。母親に教えられて、初めて、そうなんだと納得するくらいのものである。自分でも、最も古い記憶は、恐らく、五歳くらいのものだと思うのだが、それでも覚えていければ良い方で、ほとんどが記憶にない。これには、本能的に参ってしまう。自分は、かなり記憶力が悪いので、何でもかんでも、すぐに記憶して忘れずにいられる人を見ると、尊敬してしまう。

動物性というのは、ある意味では何も考えていなく、本能のおもむくままに行動しているということになるのであるが、また、一方の意味では、自由奔放な生き方をしていると言いうこともできるのではないだろうか。自分は、どうしても動物的な生き方をすることができない。どうしても、体裁を気にしてしまう自分が、どこかにいるのである。体裁など気にせずに自分のやりたいようにやればよいのだができない。そういう部分が無くならない、自分も動物的な生き方に近づけるのではないかと思う。これは、自分だけでなく最近の人間に言えること。動物的に生きるといふのが、良いことだとは、言えないが、過剰に周囲を気にしている人が多いのではないか。もっと、自由に生活できればと思う。そういう意味で、うちの兄を見習ってみるのも良いのではないだろうか。

(西川 将宏・弟)



ボランティアをすること

伊東 恵一

私にとってボランティアとは、様々な人々と触れ合う機会です。日常生活の延長のようなものですが、唯一異なる部分は、対象者は様々な障害を抱えているということです。私は健康者です。今まで大きな病気、怪我に縁なく過ごしてきました。障害と無縁の生活を送ってきた私がボランティアを始めたとき、一番悩んだのは、障害を持った人との付き合い方でした。

例えば、自分の趣味のスポーツなど、障害者に縁のない話をする。相手に自慢、謙味と捉えられ、ひんしゆくをかうのではないかと気を遣っていました。しかし、すぐにこの考え方はおかしいと気が付きました。私は健康者の友人と会話するとき、好ましい話題、趣味などは人それぞれ多様ですから、その点に因っては合わせませんが、頭の中での内容を自主規制したりはしません。翻って障害者に対してだけ特別に気を遣うということとは相手と自分と対等に考えていない証拠ではないか。そう改めた私は障害をもった人との付き合いで感じたこと、考えたことはそのまま相手に伝えるようにしました。健康者と全く同じ態度で接したのです。しかし健康者と同様の接し方とはいえず、相手は障害者を持つていて、どううまく行かない部分、苦手なこと、私に補えることであれば手を貸します。肉体的に異なっているにも精神的には全く自分と同じ存在であると考えます。健康者も障害者も同じ人間であることに変わりはなく、同じ接し方であるべきだと、今でも確信しています。

ただ、自分が正しいと信じて行動しているも、第三者の冷静な視線からすると滑稽にしか映らないという場合もあるでしょう。そうならないように適宜、周囲の状況、助言を基に行動規範を修正しつつ、これからは自分なりのボランティア活動をしていきたいと思えます。

(ボランティア)

日本小児自動車協会金沢支部よりのお知らせ

この度日本小児自動車協会から、平成十年度オートレース補助金を送付し、左記の事業を支援いたしました。

ここに事業完了の報告を申し上げますと共に、日本小児自動車協会を始めて、ご協力を賜りました関係各位に感謝の意を表します。

- 一、事業名 平成十年度知的障害者更生施設のリハビリテーション事業
- 一、事業の内容 知的障害者更生施設の増設整備
- 一、総事業費 二億二千九百八十八万八千円
- 一、補助金額 八千三百八十八万八千円
- 一、実施場所 千葉県市原市今富二一〇番地一
- 一、送付年月日 平成十一年二月二十八日

社会福祉法人 佑啓会

理事長 南弘

平成十年度「NHK金沢大賞」

賞状金のお知らせ

この度共同募金会より、NHK金沢大賞に選ばれたことにより、左記の物品を贈呈して頂きました。ここに、御礼申し上げます。併せて関係各位に御礼の意を表します。

- 一、物品名 三十三型テレビ・ラック 一式
- 一、受取金額 二十五万円
- 一、受取年月日 平成十一年三月三十一日

社会福祉法人 佑啓会

理事長 南弘

編集後記

春の陽気の中、テレビから聞こえてきたある言葉が耳に残っています。

「幸せな子に育てるのではなく、どんな環境でも幸せと思える子に育てたい。」

安藤 美和子